コミュニケーションスキルチェックシートの開発

中村　干城*・木村　文香**

キーワード：ソーシャルスキル，臨床実践，集団適応

本研究の目的は，対人コミュニケーションの具体的なスキルを測定する尺度を開発することである。

対人コミュニケーションのスキルに関する研究は，数多くみられ（e. g., 大坊，2011；橋本，2011；堀毛一也, 2011；磯，2011；木村ら，2010；小川，2011），社会的適応を促すためのトレーニング・プログラムの開発も行われているが（e. g., 相川，2000），その多くは，コミュニケーションのスキルを，社会的スキルや well-being の下位概念や，それらを向上させるためのツールとしてとらえている。その結果，コミュニケーションそのものではなく，社会的スキルや well-being の測定を行うことで，コミュニケーションスキルの状態に言及する構図となっている。コミュニケーションのスキルについて，木村ら（2010）は，対人社会的スキルの１つとして，会話者のみならず，観察者の対人コミュニケーション認知を位置づけ，対人コミュニケーションスキルのトレーニングプログラムの開発の基礎研究としている。この研究では，自らが対人コミュニケーションを行う会話者としての能力と，他者の対人コミュニケーションを認知する観察者としての能力を区別して検討することの重要性を指摘している。社会的スキルの下位概念として対人コミュニケーションをとらえると，目の前の他者とうまくコミュニケーションを行い，問題を解決する能力である「対面交渉能力」と，集団生活を快適に営むために必要な，自らと他者，もしくは他者と他者の関わりといった周囲の「社会的状況判断の能力」があるとし，この２つの能力の関係性は高いとしている。木村ら（2010）は，対面交渉能力，社会的状況判断のいずれのスキルについても，対人関係のルール（e. g., Argyle & Henderson, 1985　吉森編訳，1992）と対人コミュニケーションの知識（e. g., Rosip & Hall, 2004）を参照するプロセスが共通しているため，両スキルに関連性があるとしている。効果的な対人コミュニケーションのトレーニングプログラムを実施するにあたっては，その目的について，単に「対人コミュニケーションのスキル」の向上とせず，この両者，あるいは，そのうちのいずれの能力の向上，もしくは獲得を目的としたプログラムなのかということを明言する必要があることを示唆しているといえよう。しかし，実際には，このように対人コミュニケーションのスキルを詳細に区別して検討されたトレーニング・プログラムも開発されていないのが，現状である。

一方，日常生活において対人コミュニケーションに問題を感じ，そのことによってメンタルヘルスの状態が悪化するという臨床例は数多い。特に，近年，心理臨床の現場のみならず，学校や産業領域においてもその対応が注目，懸念されている発達障害においては，その障害特性として，「社会性」「コミュニケーション」「想像力」の三つ組みの障害が指摘されており，対人コミュニケーションのスキルに特化したトレーニングプログラムの

2011 年 11 月 30 日受付
* 筑波大学大学院人間総合科学研究科　臨床心理学・精神保健学
** 江戸川大学　人間心理学科専任講師　臨床心理学・社会心理学

開発は急務といえる。しかし，成人の発達障害者向けのトレーニングプログラムには，2つ問題がある。ⅰ）対象者とそれに伴う内容についての問題と，ⅱ）評価指標の問題である。

一つめの，対象者とそれに伴う内容については，現在，実施や開発が行われているプログラムの多くは，TEACCH（Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children）をはじめ，幼児から学齢期の子どもを対象としたトレーニングプログラムであり（e. g., 笹野ら，2011；武藏・白井，2011；中島ら，2010），大人を対象としても，発達障害の子どもを持つ親を対象としたペアレント・トレーニングのプログラムであるということである。近年になって，思春期を対象としたプログラムや，大学生を対象としたプログラムの開発がいくつか行われているものの（e. g., 根来ら，2006；池田，2011；絹谷，2005），成人を対象としたものはほとんど見られない。子どもや大学生を対象としたプログラムを，成人を対象にアレンジすることも不可能ではないようだが，年齢や状態に合わせたスキルのトレーニングという点では，不適切な部分も多く，継続的なプログラムとなると，内容的に行き詰まり，参加者のモチベーションも低下するため，その実施が困難となる場合が多い。就労や社会での適応的なソーシャルスキルや，コミュニケーションスキルについての成人を対象としたトレーニングプログラムとしては，SST（Social Skill Training）が一般的ではあるが，発達障害者を対象とした場合に，「社会性」「コミュニケーション」「想像力」をはじめとする，発達障害者の障害特性を考慮したコンセプトではなかったことから，その安定した集団運営には，実施者であるリーダーに，かなり高いスキルが求められることが少なくない。そのような状況の中，Communication Enhancement Session（CES）は，成人の発達障害者を対象に，実践の中で開発されたプログラムであり，彼らが対人関係上，感じている問題への焦点化に加え，彼らの有する視覚からの情報摂取能力，独創的な発想や言語能力を活かし，視覚化，言語化，定型化の3つによる構造化を特徴としている（Nakamura *et al.,* 2011；中村，2011）。また，CESは，彼らが抱えている社会的な不利益の軽減を目的に，構造化されたプログラムとグループダイナミクスを併せることで，コミュニケーションに関する気づきを促し，対人関係を核とした社会への認知の再構築と，年齢に応じた適応的な行動の獲得，中でも対人コミュニケーションの改善を具体的な目標としている。つまり，成人が，社会で実際に用いることのできる，対人コミュニケーションの具体的なスキルである，対面交渉能力の向上と社会的状況判断の能力の向上に焦点を当てたトレーニング・プログラムであるといえる。

しかし，トレーニング・プログラムのもつ2つめの問題であげた「評価指標の問題」については，CESで解決することはできていない。公的機関におけるデイケアでのCESの実施によって，WAISや風景構成法によるテストバッテリーの結果に変化がみられ，支援チームによるみたてでも好転していることが指摘されており，短期的にも長期的にも，一定の効果を上げていることが報告されているが（Nakamura *et al.,* 2011；中村，2011），対人コミュニケーションのスキルを直接数量的に測定することはできていない。KiSS-18（菊池，1988）は，ソーシャルスキルうち，コミュニケーションスキルについても言及しており，目の前の他者からポジティブな反応を引き出す一方，ネガティブな反応を回避する能力を測定している（菊池，2004）。このように，既存の対人コミュニケーションに関する測定尺度は，社会的スキルの下位概念の一つとしてコミュニケーションを捉えているため，具体的な対人コミュニケーションのスキルを詳細に把握することが難しい。さらに，これらを心理臨床場面で，対面交渉能力と社会的状況判断能力からなる対人コミュニケーションに焦点を当てたトレーニングの効果測定に用いるには，設問数が少なく，内容も抽象的なものが多いことから，それらを網羅することができず，参加者の変化を反映しにくい構成となっている。また，根来ら（2006）は，発達障害者を対象とし，具体的なコミュニケーションのスキルを測定する尺度を

開発している。しかし，その対象者は中学生であり，成人にそのまま適用するには不十分な点が多く，適切な評価指標を用いた正確な効果や，効果の現われたプロセスを検討することは難しいと考えられる。

そこで，成人を対象とした，対面交渉能力と社会的状況判断能力を合わせた包括的な対人コミュニケーションスキルの測定する尺度を開発することを目的として，本研究を行った。

方　法

調査対象者と手続き

首都圏の私立大学に通う大学生1年生から3年生186名（男性90名，女性95名，不明1名）を対象に，無記名・自記入形式の質問紙調査を実施した。

調査時期

2011年1月下旬。

質問紙の構成

コミュニケーションスキル

根来ら（2006）によるコミュニケーションスキルの指導の成果を測定するチェックリストの項目を参考にしながら，文言や内容を成人向けに変更し，不足していると考えられる項目を加えた，コミュニケーションスキルチェックシート（Communication Skill Check Sheet; CSCS）を用いた。この項目の検討は，公的相談機関のデイケアにおいてCESを実施するなど，成人の発達障害者に支援者として関わっている専門職（グループワーカー，精神科医，心理職，福祉職）が協議を重ねて行った。採用した項目は30項目であり，5件法にて実施した。

ソーシャルスキル

基準関連妥当性を検討するために，Kikuchi's Social skill Scale（KiSS-18）を用いた。

結　果

因子構造の探索

主因子法プロマックス回転による因子分析を行ったところ，Table 1のような結果となり，7因子が抽出された。ただし，t第7因子については1項目のみであったため，下位尺度としては採用せず，6因子構造とした。また，CSCSを全体として分析する際には，当該項目も含めた30項目での尺度とすることとした。

採点方法

CSCSは，「よくできる」から「全くできない」の5件法で回答を求めた。採点の際には，「よくできる」を5点，「全くできない」を1点とした。CSCS全体の合計点をCSCS得点とし，コミュニケーションスキル全般を示す得点とした。

さらに，前項の因子分析で抽出された因子をCSCSの下位尺度とし，各下位尺度で得点を算出した。下位尺度ごとの得点には，各項目の得点を合計したものを項目数で割った，各下位尺度の平均値を用いた。

以上のように算出された項目得点と，各下位尺度得点の平均値と標準偏差は，Table 1に示した通りであった。

信頼性の確認

30項目すべてを対象として，内的整合性をクロンバックのα係数を用いて算出したところ，.94であった。

さらに，抽出された6因子に基づく各下位尺度の内的整合性をクロンバックのα係数を用いて算出したところ，Table 1に示したように，.61から.89となり，CSCS全体，各下位尺度，いずれの内的整合性も高いことが示された。

また，Spearman-Brown法による折半法によって，信頼性係数を求めたところ，.88であり，折半法に依っても，信頼性が高いことが示された。

Table 1　CSCS 因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	共通性	平均値	*SD*
配慮（α＝.82）									3.56	3.85
相手の反応を確かめながら話をすることができる	.81	−.05	−.06	.08	.13	.03	−.11	.66	3.95	.82
相手の質問に関連して思いついたことを適当に持ち出さないようにできる	.77	−.05	.04	−.24	.05	.02	−.03	.48	3.23	.84
話題に関係のある発言をすることができる	.74	.11	−.14	−.06	.05	.10	.04	.58	3.73	.86
相手の質問に無関係なことを話さないようにできる	.56	.13	−.05	.15	−.01	.01	−.20	.46	3.54	.91
話が一方的にならない様な配慮ができる	.41	.19	.06	.08	−.06	.07	−.07	.40	3.59	.93
話題を変えるという合図を送ることができる	.28	.18	.24	−.03	.00	−.09	.20	.41	3.33	.96
理解（α＝.84）									3.69	4.04
課題や自分がやるべきことが終わったら，指示を仰ぐことができる	.04	.89	−.09	−.16	.05	−.01	.10	.67	3.61	.91
自分が伝えたい用件や意思は，自分で伝えることができる	−.01	.66	.03	.07	.04	.11	−.09	.61	3.80	.92
時間，状況，場所にふさわしくない話題は，自分から避けることができる	.07	.66	−.10	.09	−.05	−.09	.00	.43	3.77	.88
相手が何を伝えようとしているほぼ理解できる	.00	.56	.18	−.01	.00	−.15	.10	.45	3.68	.88
説明されたことを相手に確認できる	.10	.49	−.06	.17	.03	.08	.20	.56	3.69	.88
相手に質問された内容についてはっきりと応えることができる	.33	.37	.03	.03	−.04	.14	−.14	.48	3.57	.90
対応（α＝.85）									3.72	4.87
突然話題が変わっても，会話を続けることができる	−.06	.04	.84	−.02	.02	.01	−.07	.64	3.68	.94
冗談や微妙な感情表現がだいたいわかる	.12	.01	.69	.02	−.08	−.04	−.13	.51	3.98	.89
人の良いところに気づき，褒めることができる	−.02	−.19	.64	.22	.07	.00	.13	.51	3.89	.88
初対面の人や初めての場所で，自己紹介ができる	−.30	.42	.63	−.20	.15	.12	−.06	.66	3.33	1.19
相手に質問して会話を広げることができる	.25	−.23	.48	−.07	−.04	.46	.08	.68	3.53	1.04
話しかけてもいい時かどうかわかる	.23	.13	.30	.10	−.09	.14	.06	.49	3.69	.94
相手の言い分もきちんと聞くことができる	.24	.22	.29	.18	−.08	−.16	.00	.50	3.97	.78
伝達（α＝.74）									4.08	3.10
ありがとうなどの感謝の言葉を言える	−.14	−.01	−.08	.69	.06	.16	.18	.44	4.31	.85
遅刻や欠席，早退の連絡が言える	−.13	.15	.01	.57	−.10	.18	.09	.41	3.89	.97
話し手の話にあわせてうなずくことができる	.03	−.06	.16	.45	.37	.06	−.12	.55	4.25	.79
相手の様子が何かいつもと違うということがわかる	.25	−.15	.24	.42	−.06	−.11	.12	.44	3.98	.89
状況や相手に合わせた言葉づかいができる	.28	.17	.18	.28	−.02	−.20	.08	.51	3.96	.90
視線（α＝.89）									3.84	1.94
相手の目を見て聞くことができる	.02	.00	−.02	.05	.88	−.04	.06	.78	3.89	1.01
相手の目を見て話すことができる	.13	.02	.01	−.06	.86	−.01	.02	.80	3.78	1.03
説明（α＝.61）									3.37	2.39
よく分からない時は質問することができる	−.04	.04	−.07	.34	−.01	.71	−.06	.58	3.61	1.07
分かりやすく簡潔に話すことができる	.41	−.01	−.04	−.16	−.01	.48	.18	.56	2.81	1.01
断りの理由をはっきり言える	−.02	.27	.03	.22	−.05	.29	−.06	.32	3.68	1.10
信頼										
信頼できる人に困ったことなどを相談することができる	−.17	.11	−.06	.28	.05	.03	.71	.57	3.68	1.11
因子間相関　F 2（理解）	.578									
F 3（対応）	.663	.642								
F 4（伝達）	.499	.550	.505							
F 5（視線）	.246	.359	.411	.246						
F 6（説明）	.37	.44	.43	.08	.42					
F 7（信頼）	.27	.25	.36	.06	.11	.23				
固有値	7.51	7.79	7.95	5.18	3.65	3.87	1.92			
累積寄与率（%）	34.43	4.98	4.21	3.19	2.81	2.21	1.97			

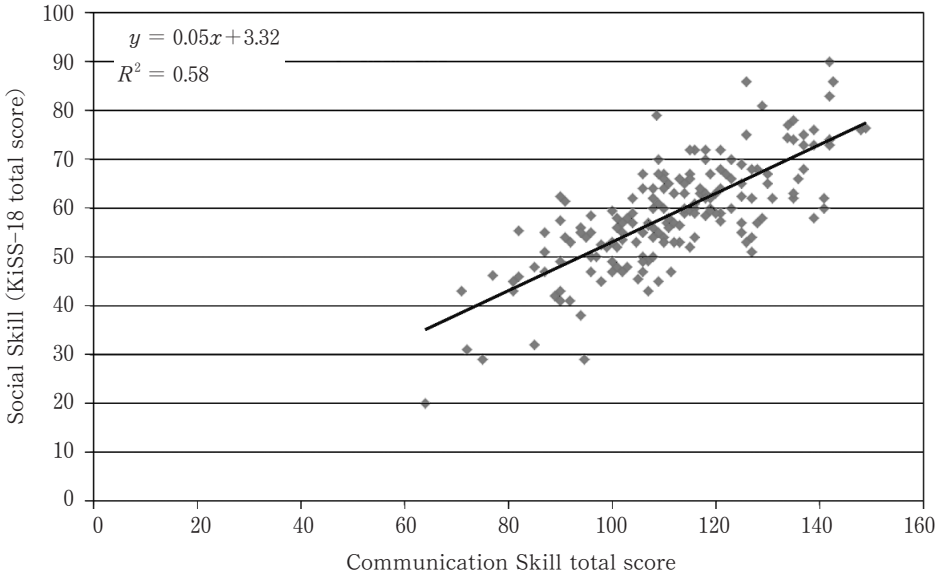

Figure 1　Communication Skill Check Sheet と KiSS-18 の散布図

妥当性の確認

妥当性については，CSCS と構成概念に密接に関連する KiSS-18 を外部基準とする基準関連妥当性を用いて検討したところ，CSCS，KiSS-18 いずれについても総得点同士の相関係数が .58 で，5%水準で有意であり，妥当性があることが示されたといえる。この散布図については，Figure 1 に示した通りである。

考　　察

CSCS は，30 項目全体の内的整合性，基準関連妥当性，いずれも高く，また各下位尺度で信頼性，妥当性をみても，高いことが示された。

このように，CSCS は，30 項目全体を用いることで全般的なコミュニケーションスキルを測定する尺度として用いることも可能である上に，下位尺度ごとに，コミュニケーションスキルを測定する尺度として用いることも可能である。

以上のことから，CSCS は，社会的スキルとしての，コミュニケーションに関する能力のうち，対面交渉能力の「伝達」「視線」「説明」と，社会的状況判断の能力である「配慮」「理解」「対応」といった具体的な技術について測定することが可能な尺度といえる。

今後は，確認的因子分析をすることで，より安定した因子構造を確認し，また男女別，年齢別などの対象ごとに平均値を求めることで，基準値を示し，臨床場面での応用を可能にしていくことが求められる。

引用文献

相川　充　2010　人づきあいの技術 ── 社会的スキルの心理学 ──，サイエンス社.

Argyle, M. & Henderson, M.　1985　*The anatomy of relationships and the rules and skills to manage them successfully,*　London: Penguin books.（吉森護（編訳）　1992　人間関係のルールとスキル　北大路書房）

大坊郁夫　2011　Well-being を高めるために，対人コミュニケーションを活かすために（Well-being を高めるためのコミュニケーション力 ── 社会的スキルの研究），対人社会心理学研究，**11**, 29–32.

橋本　剛　2011　スキル，対人ストレス，サポート，そして well-being（Well-being を高めるためのコミュニケーション力 ── 社会的スキルの研究），対人社会心理学研究，**11**, 11–16.

堀毛一也　2011　主観的 well-being の概念と社会的スキル（Well-being を高めるためのコミュニケーション力 ── 社会的スキルの研究），対人社会心

理学研究，**11**, 4–10.
磯友輝子　2011　体験型 SST によってもたらされる well-being（Well-being を高めるためのコミュニケーション力 ── 社会的スキルの研究），対人社会心理学研究，11, 17–22.
池田伸子　2011　大学における発達障害等学生へのソーシャルスキルの導入について（平成 22 年度［北海道特別支援教育学会］研究発表中央大会報告）──（平成 22 年度研究大会講座 B『特別支援教育推進にかかる「管理職のリーダーシップの発揮」を学び合おう』関連報告），北海道特別支援教育研究，**5**(1), 111–113.
菊池章夫　1988　思いやりを科学する　川島書店.
菊池章夫　2004　KiSS-18 研究ノート，岩手県立大学社会福祉学部紀要，**6**(2), 41–51.
木村昌紀・大坊郁夫・余語真夫　2010　社会的スキルとしての対人コミュニケーション認知メカニズムの検討，社会心理学研究，**26**(1), 13–24.
絹谷雅典　2005　高機能広汎性発達障害児およびその家族に対する包括的支援とその臨床心理学的意義について ── こども活動と親活動の相互関係の視点から，障害児教育研究紀要，**28**, 77–87.
武藏博文・白井佐和　2011　広汎性発達障害児を対象としたソーシャルスキルトレーニングの効果(2)「怒り」に対する感情理解及び感情コントロールを中心として，香川大学教育実践総合研究，22, 77–89.
中村干城　2011　成人アスペルガー症候群への治療的アプローチ ── 臨床場面での実践から ──，日本行動療法学会第 37 回大会発表論文集，70–71.
Nakamura, T., Kimura, F., Kumashiro, N., & Inoue, S. 2011 *A communication training program for adults with developmental disabilities,* 7th International Congress Cognitive Psychotherapy, Istanbul.
中島俊思・田ノ岡志保・岩崎美佳・重富彩香・大西将史・辻井正次　2010　広汎性発達障害児を対象にしたソーシャルスキルトレーニング，双方向コミュニケーションプログラムの実施と効果の検討，小児の精神と神経，**50**(4), 454–455.
根来あゆみ・谷川尚・西岡有香　2006　高機能広汎性発達障害児に対するコミュニケーションスキル指導の試み ── ビデオ評価による自己認知の改善を目指して（特集実践報告），LD 研究，**15**(2), 183–197.
小川一美　2011　コミュニケーション力と well-being（Well-being を高めるためのコミュニケーション力 ── 社会的スキルの研究），対人社会心理学研究，**11**, 23–26.
Rosip, J. C. & Hall, J. A.　2004　Knowledge of nonverbal cues, gender, and nonverbal decording accuracy, *Journal of nonverbal behavior,* **28**, 267–286.
笹野信治・奥野康子・田中智子・出縄貴生　2011　初等・中等教育における発達障害児者支援：より良いシステムと連携をめざして，発達障害研究，**33**(1), 98–104.